

アフリカの人々と名付け 26

名前と登録——人と家畜と

小馬 徹

個人名の苗字化

コンゴでは、父親の名前の一つが固定され、苗字として父系的に継承され、苗字の表す意味がそれを持つ人の実態を示さない状況が生まれつつある。ムンデレ（色白）が苗字でも肌色の暗い人があるし、ンパシ（難産）が苗字の人も難産の結果生まれたとは限らない〔武内進一「名前と意味の変容」、松本脩作・大岩川嫩『第三世界の姓名』、1994〕。

ザイルのテンボ人は、父親の渾名を苗字のように使い始めた。ンデフ（髭）と呼ばれる髭のない人や、ミリモ（働き者）と呼ばれる怠け者もいる「梶茂樹「テンボ族における個人名」『季刊人類学』16(1)、1985〕。

いくさめい

戦名の人名化

同じ事は、異なる道筋で、例えば、職業名や地名が苗字化する場合にも起こり得る。アラブ系のイスラム教徒で「川辺の民」と総称される民族集団が、北部スーダンにいます。ここでは、左官、石工、呪符書記などの職業名が、子孫の職業に関わりなく苗字のように使われている。肉屋を表すAl-Jazzar を英訳すれば“the Butcher”となる〔Al-Shahi, Ahmed “Some Personal Name and Nicknames among the Riverine Peoples of Northern Sudan”, JASO 18(2), 1988〕。かつての悪役プロレスラー、アブドラ・ザ・ブッチャー氏を思い出せば、事態はぐっと身近になるだろう。

我々は、すぐに鍛冶、大工や、Goldsmith、Carpenterなどの苗字を連想する。なお、富山県新湊市には酢、豆腐、味噌、釣など、商う品物や生業に由来する苗字が多い。

ハウサでも職業に因む「キャラバン隊長」、「長距離交易商」、「藍染師」などの他に、

「貿易商」(Tireda), 「仕立屋」(Tela) などの英語起源の苗字や、「自動車部品商」(Madugu) といった現代風の職業に由来する苗字もあると言う〔松下周二「西アフリカハウサ族の名づけ」『月刊言語』19(3)、1990〕。

地名の人名化

「川辺の民」間では、メッカ、メディナとかアジアや地方の出生地・居住地名や、「予言者の土地」、「豊穡の家」などの抽象的な美称も苗字化している〔Al-Shahi, *ibid.*〕。

また、ハウサでも、古い都市名の他に、異国やその都市の名、あるいは「新町」、「長者ヶ丘」などの名前も「中華風の本籍地名」として「正式の名の後に付加されることがある」という〔松下周二、前掲書〕。

すぐに越後、越前、加賀、陸奥などの苗字が連想されよう。いずれも、商家の初代が異境で名乗った屋号から出た苗字で、越後には越後屋や越後さんは存在しない。これらは、いずれも子孫の属性を直には表していない。ちゃきちゃきの江戸っ子の越前さんも、スーダン人になって久しいAl-Masri (エジプト人) さんも、貧しい「長者ヶ丘」さんもあるはずだ。また、ハウサ〔松下周二、前掲書〕ばかりでなく、スワヒリなどイスラム化された地域では、日本と同様、官職名の苗字化も見られる。

こうした苗字を名乗る者とそのいわれの乖離は、世代が重なるほど増幅する。例えば、1997年のNHK大河ドラマの主人公、戦国期の中国地方で覇を唱えた毛利元就の苗字はどうか。それは、彼の11代前の祖先大江秀光が所領毛利庄（現神奈川県厚木市）に因んで名乗ったものだが、由来を知る人は少ない。名

前とは、分類名称そのものではないのだ。

人の苗字、牛の名前

ここで思い出すのは、連載第18回で触れた、南西ケニアに住む南ナイル語系の農牧民キプシギスによる牛の命名法である。彼らは、牛の体色・模様・角の形・他の身体部位の特徴・性格などのどれか一つに因んで個体名を付ける。こうした家畜の命名法は、東アフリカの牧畜民に広く見られる事が知られている。

一部には、家畜のこうした名前は本当は名前ではなく、範疇なのだという議論がある。だが、キプシギスでは牛のどの特徴にちなんで命名するかは命名者の主体的な判断による。だから、最も顕著な客観的特徴が命名の根拠になるとは限らない。つまり、一元的な命名基準は存在しないのだ。その結果、キプシギスでは、実際の名前を知らない者がたまさかある家畜の叙述に用いる範疇名と、特定の個体の名前とが一致しない場合が少なくない。

北西ケニアに住む東ナイル語系の牧畜民トゥルカナでも、事情は同じだ。家畜の個体名が命名対象の属性といかに関連しているかは、命名者に直に尋ねなければ分からない。例えば、ある植物を指す普通名詞に由来する個体名をもつ家畜の場合、命名の由来は、①その植物の近くで生まれた、②体色か模様がその植物の花か実に似ている、③この植物に由来する個人名を持つ人物に因んで名付けた、等々が考えられる〔太田至「家畜の個体名はいかに付与されるか」、和田正平（編）『アフリカ 民族学的研究』、1987〕。

キプシギスの場合、どの範疇名を特定の家畜の個体名として選ぶかは、概家畜管理の便宜に関わっている。つまり、慣行に則って様々な友人から預託された個体同士の区別や、それらと自家の家畜の区別を初めとして、認知上の諸々の配慮が要請されるからだ。

繰り返そう。それぞれの分類名称は、客観的な妥当性のゆえに自動的に家畜の個体名と

なるのではなく、主観的な命名の結果として特定個体の名前になるのである。

個人名の選択、個体名の選択

ただし、この事情は苗字や家畜名に限らず、人の個人名についても同様に言える。

仮に誕生の状況に因んで子供に命名するというアフリカに広く見られる慣行を、キプシギスの男児を想定して、この脈絡で考えて見よう。もし、雨季¹⁾の昼下がり²⁾、難産の末に³⁾戸口の近くで⁴⁾生まれたとする。そして、母親は妊娠を促すために在来の薬を服用していた⁵⁾としよう。また、その日は加入礼の日⁶⁾、儀礼用のビールが醸し上がりつつあり⁷⁾、来客があった⁸⁾とする。

すると、控えめに見積もっても、この赤ん坊の「粥名」(幼名の一つ)は、上記それぞれの状況に因んで、1) Kiprop, 2) Kibet, 3) Kiptanui, Kipchirchir, 4) Kipkurgat, 5) Kipkerich, 6) Kiptum, 7) Kibore, 8) Kiptooなどが候補となる。両親は、(夫婦は伴侶の幼名や、それに含まれる語彙を口にしてはならないので)父親や赤ん坊の同腹・異腹の兄弟の粥名と重ならない名前の一つを選び出すだろう。

東北ケニアに住むクシュ系のガブラ人とタンザニアに住む南ナイル語系のダトoga人は、共に家畜の個体名を“母系的”に継承する〔Imai, I. “Small Stock Management and the Goat Naming System of the Pastoral Gabra”, *African Study Monographs, Supplementary Issue I*, 1982, 梅棹忠夫「Datoga牧畜社会における家族と家畜群」、川喜多二郎・梅棹忠夫・上山春平（編）『人間—人類学的研究』、1996〕。家畜を諸価値の中核とする人々の間では、人間の名付けも家畜の名付けも大差はない。最大の違いは、名前を国家に登録されたのが人間だけという事である。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)